



詩集
Moon Lovers
IV

たかはしみどり

Moon Lovers IV

たかはしみどり

in my heart

心に 空を持とう
広くて 大きな 空を
心の中を 自由に飛べる
喜びを あなたにあげる

心に 花を咲かせよう
色とりどりの 花を
寒い夜にも 幸せ感じる
安らぎを あなたにあげる

心に 愛を広げよう
人に 優しくなれる 愛を
白い冬にも 暖かくなる
ぬくもりを あなたにあげる

風に書いた手紙

私の心の奥に灯る

小さな 小さな 恋の灯火

誰かが気付いてしまう前に

この灯は消してしましましょう

もしも誰かに伝えるならば

風に思いを託しましょう

私の心の底に蒔かれた

小さな 小さな 恋の種

誰かが見つけてしまう前に

この芽は摘んでしましましょう

あの人への想いは風に渡して

この心から消しましょう

心に蒔かれた恋の種

小さな 小さな 花が咲く

あの人気付いてしまう前に

花は枯らしてしましましょう

愛したことは 私の罪

愛されないのは 私の罰

報われないと分かっているなら

いっそのこと忘れましょう

月の子供

わたしは月の子供です
いつも空から見ていたよ
あなたはいつでも空を見上げ
わたしの光を求めてくれた
だからわたしは地上に降りて
あなたの心に住みましょう
あなたが淋しくないように
心を照らしてあげましょう
これが わたしを愛してくれた
あなたへの贈り物です

私の心に住みついた
月の子供の優しい光
きみはいつでも高い空から
私の道を照らしてくれた
だから私はきみに恋して
きみの光で輝いていた
きみが心においてくれるなら
私はいつでも優しくなれる
私の心がいつも明るく
光で満たされているから

鏡

月夜を映す 水の鏡
暗黒の海を 静かに照らし
水面を泳ぐ 下弦の月
月の涙がどんなにあふれても
海は余すことなく 飲み込んでいるのに
君の涙が重すぎて 背を向けてしまう
ぼくの心は こんなにも小さいのか
そんなぼくを 光が包む
ぼくの涙を飲みつくすのは 闇の海

心を映す 夜空の鏡
目を閉じれば いつでもどこでも
まぶたの裏に 下弦の月
月の光はどんなに離れていても
ぼくの上に 必ず降り注いでいるのに
君の声が聞きたくて 話しかけても
ぼくの言葉は この闇に溶けてしまう
ぼくの心を 海が癒す
月の涙を受け止めるのは 夜の海

ぼくの居場所

澄み渡る 青い空と碧い海
寄せては返す波の音
風に吹かれる君とぼく
君のそばが心地いいから
ずっと離れずにいたい

窓に映る 穏やかな横顔
君はぼくの言葉を待って
静かにコーヒーを飲んでいる
ぼくの居場所を守るため
弱い自分と訣別しよう

雨の街 肩寄せ合って感じたぬくもり
ぼくを見上げる君の瞳
ぼくの腕を離さずにいて
君の愛が心地いいから
いつまでもこうしていたい

助手席で眠る 安らかな寝顔
この同じ空の下
君と生きると決めたから
君の笑顔を守るため
ぼくはこれから戦いに行く

冬の贈り物

凍った空気が キラキラ光る朝
夢の中にいるぼくを 優しく起こすのは
入れたてのコーヒーと トーストの香り
当たり前の風景は 冬の贈り物

吐く息も白く 宙を泳ぐ日
わたしの冷えた手を 温めてくれるのは
あなたのコートのポケットだった
今感じるぬくもりは 冬の贈り物

心がこわばり チクチク刺さる夕暮れ
ぼくの疲れた心を 癒してくれるのは
夕食の匂いと “お帰り”の一言
ずっと大切にしたい 冬の贈り物

悲しみに頬を濡らすとき
優しく涙をぬぐってくれるのは
あなたの右手と 甘いホットミルク
立ち上る湯気は 冬の贈り物

不安に溢れて 眠れない夜
ぼくを深い眠りに導いてくれるのは
君のhagと 優しい“おやすみ”
ここにある幸せは 冬の贈り物

この幸せが ずっと続けと祈る夜
暖かい気持ちをさらに包んでくれるのは
ろうそくの向こうのあなたの笑顔
ずっと変わらずここにある 冬の贈り物

そこには 不思議な鏡があるという
鏡に映る時計を見ると 時間が逆戻りする
それも満月の夜 12時にかぎって

その日は偶然 満月の夜 12時
覗き込んだのは その不思議な鏡
たちまち時間の渦に巻き込まれる

トンネルを抜ける途中に聞こえた声
本当の自分を見失ってはいけないよ
元の場所に戻れなくなる 忘れないで

やり直したい過去なんてわたしにはない
何処で時間の流れを戻そうか
そうだ 未来の私が会いたい人がいる時間

その人は 変わらず私のそばにいて
言葉少なに私に笑顔を向けている
共に過ごす いつもの懐かしい仲間

それはつかの間の幸せなとき
過去の人を未来に連れては戻れない
ここはわたしのいるべき場所じゃない

気付けば 満月の夜 12時
不思議な鏡の前に立ち
夢から覚めた私がいる

今は何処で だれといるのか 幸せなのか
尋ねる勇気も術もないから
次の満月の夜 12時 また会いに来る

きっとどんなに時間をかけても 心のすべてを語りつくすことはできないでしょう。ありのままの 正直な気持ちを どんな言葉で どんな仕方で伝えられるのか 不器用な私には分かりません。愛することを恐れていた私に あなたは愛し 愛される勇気をくれました。それだけで私はあなたに感謝しています。あなたはいつでも私を大切に思ってくれる。でも私はあなたに何をしてあげられるか いくら考えても思いつきません。こんな私だから どんなに強がっていても いつでも不安です。この愛を失うことが不安です。それでも いつも あなたがそばにいてくれるから 不安も涙も心の奥に隠してしまいます。ただ確かなことは私があなただを愛していること その気持ちに偽りはないこと あなたを大切にしたいと思っていること 今 私の中で愛は育っているということ。二人の時間を ゆっくり刻んでいきましょう。転ばないように しっかりと歩いていきましょう。この愛を じっくり育てていきましょう。今 あなたを愛してよかったと 本当に 心からそう思います。

君からの手紙を読んだところ。君が不安なのと同じように
ぼくも不安を感じている。君がぼくを愛する気持ちに ぼ
くは上手に応えているのだろうか。君が不安や涙を隠して
いることは 君にとって 苦しいことではないのだろうか。
ぼくの愛は 君にとって 重いものになっていないか。ぼく
が君を愛することは 君を幸せにしているのだろうか。ぼく
に何をしたらいいのか思いつかない と君は書いていたけ
れど 君は君のまま 今のままでいい。そのままいてほ
しい。どんなに多くの不安があっても それは 二人に終
わりが見えているからではない。きっと ぼくらが抱く不
安というのは お互いを思うからこそそのもの。ぼくが君と
いることで 幸せを感じているように 君も ぼくといる
ことを 幸せと感じてくれているなら ぼくらは大丈夫さ。
ぼくらのパズルは 未完成。二人で植えた この花の種も
これから花を咲かせるところ。これからも 二人の色を作
り 二人の音を 奏でていこう。二人の愛の形を作ってい
こう。二人で 寄り添って 生きていこう。ずっと二人で。

一粒の幸せ

幸せさがしをしたはずなのに
今 一粒の幸せを探してる
それはきっと かなうはずのないことが
思いがけず かなうことがあるから

たとえば 夢であなたに会うとき
たとえば あなたの瞳に私が映るとき
たとえば あなたがわたしに微笑むとき
たとえば あなたがわたしを愛するとき

もしかしたら すぐそばにある
少年とつないだ 手の中に
少女が見つけた幸せのように
一粒の幸せはたくさんある

たとえば 私があなたを愛すること
たとえば 寒い夜のコーヒーの湯気
たとえば あなたと私の信じる未来
たとえば 今 ここにある命

もう 幸せさがしはしないでしよう
守ってくれる人がいるから
大切にしたい人がいるから
この幸せが 消えることはないから

fragile

“僕を信じて”と人は言う
その言葉こそが信じられない
信じる根拠は何もない
その簡単な言葉の奥に
何を隠しているの？
裏切りは何処にでもある
ぼくはだれも信じない
ぼくの心は凍ってしまい
だれにも心を開かない

“僕に話して”と人は言う
その心に秘められた
裏切りが見えるから
そんな優しい言葉は
余計にぼくを遠ざける
だれも信じることができず
感情を失ったとき
凍っていたぼくの心が
壊れる音が聞こえた

それでもぼくにはたった一人
信じられる人がいた
その穏やかな心は
決してぼくを裏切らず
ぼくの心を救ってくれる
他のだれを信じなくても
世界を敵に回しても
君がそこにいてくれるから
ぼくはこうして生きている

雨音

降り始めた雨に祈る

まだ激しく降らないで

もうすぐあの人がここへ来るから

あの人の足音が聞こえるように

時を刻む時計の音を消さないように

静かに降り続けていて

降り続く雨に祈る

もっと激しく降ってほしい

雨が止んでしまったら

あなたはこの部屋を出て

二度と来ない気がするから

遠ざかる足音は聞きたくない

雨はいつしか雪に変わった

このままずっと降り続いて

私たちを閉じ込めていて

あなたが私を抱きしめて

二人の終わりが遠ざかるように

ずっと二人でいられるように

スピカ

二人寄り添う 星☆降る夜
そこに輝く 星の名は
偶然きみと 一緒だった
その星と おんなじ色の
キラキラ輝く 瞳には
悲しみ色の 涙があふれた

手が届きそうな 星☆降る夜
西の空を 見上げてごらん
そこに笛吹く 天使が座る
月のブランコ 見つけたら
こぼれた涙は 星になり
きみの願いは 叶っているはず

despair

信じることができないのなら
あなたは消えてしまいなさい
誰かを傷つけてしまうなら
あなたは死んでしまいなさい
海は その深さゆえ
涙を飲み込んでくれそうで
だれもが話に来るのだろう
そんな気持ちを抱いたまま
生きていくのが苦しいのなら
心を殺してしまいなさい
海に体を沈めなさい

愛することができないのなら
あなたは消えてしまいなさい
憎しみを消せないのなら
あなたは死んでしまいなさい
闇は その広さゆえ
思いを閉じ込めてくれそうで
だれもが素直になれるのだろう
それさえできなくなるほどに
生きていくのが苦しいのなら
闇に心を売rinaさい
あなたが闇に消えなさい

そして...

海に沈んでしまおう
そんな私を救ったのは
海に浮かぶ月だった
波と戯れる満月は
私の心も光で照らし
涙をすべて飲み込んだ
私も誰かを信じてみよう

闇に消えてしまおう
そんな私を救ったのは
夜空に輝く月だった
闇に揺れる朧月は
私の涙をそっとすくい
心の闇を吸い込んだ
私も許し 愛してみよう

詩集Moon Lovers IV

<http://p.booklog.jp/book/59792>

著者：たかはしみどり

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/midri7911/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/59792>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/59792>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ